

重度の過蓋咬合を伴う成人 AngleⅡ級 1 類および 2 類不正咬合の歯性・骨格性の形態

塩谷 翔太

論文内容の要旨

本研究は、側面セファロ分析によって重度の過蓋咬合を伴う成人 AngleⅡ級 1 類と 2 類の不正咬合の歯性と骨格性の形態的特徴を明らかにすることを目的とした。Overbite が 5mm 以上の AngleⅡ級 1 類 (Group 1) と 2 類 (Group 2) 不正咬合者、および正常咬合者の成人男女各 32 名の形態的特徴について 3 群間で比較した。Overbite の深さと他の各項目の間で相関関係を調べ、さらに overbite の深さを目的変数とした重回帰分析を行い、以下の結果を得た。

- 1) Group 1 と Group 2 の比較では、骨格性の項目に有意差が認められなかった。
- 2) Group 1 では下顎中切歯は有意に高位で、下顎第一大臼歯の歯軸は有意に近心傾斜していた。
- 3) Group 2 では上顎第一大臼歯が有意に低位で、上下顎第一大臼歯は有意に遠心に位置していた。
- 4) Group 1 では、overbite の深さと下顎下縁平面から下顎中切歯の切縁までの距離の間で正の相関が認められた。
- 5) Group 2 では、overbite の深さと翼口蓋窩から上顎第一大臼歯遠心接触点までの距離に正の相関、口蓋平面から上顎第一大臼歯近心頬側咬頭頂までの距離に負の相関が認められた。

論文審査の要旨

重度の過蓋咬合を伴う成人 AngleⅡ級 1 類と 2 類不正咬合の間で過蓋咬合に関する形態的特徴については十分に検討されていない。本研究は、重度の過蓋咬合を伴う成人 AngleⅡ級不正咬合で、1 類と 2 類の間に骨格性の差異は認められず、1 類では下顎中切歯、2 類では上顎第一大臼歯の垂直的位置と関連性があることを示唆している。以上は過蓋咬合の矯正歯科治療に重要な情報を与えており、歯学に寄与するところが多く、博士 (歯学) の学位に値するものと審査する。

主査 志賀 博
副査 代居 敬
副査 佐藤 巖

最終試験の結果の要旨

塩谷翔太に対する最終試験は、主査 志賀 博教授、副査 代居 敬教授、副査 佐藤 巖教授によって、主論文を中心とする緒事項について口頭試問が行われ、優秀な成績で合格した。